

書名：わたしを離さないで
(原題：Never Let Me Go)

著者：カズオ・イシグロ

訳者：土屋政雄

出版社：早川書房

出版年月：2008年8月

総ページ数：450ページ

ISBN：9784151200519



推薦者

杉浦裕子

鳴門教育大学大学院准教授
言語系コース（英語）

心に残っている小説はいくつかありますが、あくまで自分の趣味なので改めて学生の皆さんに推薦するとなると迷ってしまいます。そこで、代表的なものを一つ棚に陳列してもらいつつ、ここでは三つの小説をご紹介しますと思います。

まず、日本生まれのイギリス人作家、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』(原題：Never Let Me Go)。初めて読んだ時は、ヘールシャム寄宿学校の奇妙な真実に衝撃を受けたが、本書は読者を驚かせようとするミステリー小説でも、科学の発展に警鐘を鳴らす諷刺小説でもない。ヘールシャムの生徒たちは、将来の夢を持つことも叶わない中で、徐々に自分たちの運命を悟り受け止めていくが、こうした設定はあくまでメタファーで、描いているのは現実世界の人間である。再読した時には、登場人物たちの微妙な心理の揺れがいに細やかに描かれているかに注目した。抗えない運命、置かれた状況を受け入れながら、周囲との関係の中で自分や他人の感情の起伏にうろたえつつ、小さな日々を死ぬまで重ねること、一見消極的に見えるが、多くの人にとって生きるというのはそんなものである。「人間とは何か」というテーマを扱いつつも、不条理小説のような暗さに読者をつき落とすのではなく、死ぬまで生き、愛することの希望を描いている。ちなみに本書は2011年に映画化され、DVDを図書館の視聴覚室に入れているので、併せて楽しんで頂きたい。

次にご紹介するのはドイツの法学者で小説家、ベルンハルト・シュリンクの『朗読者』(原題：Der Vorleser)。この作品との最初の出会いは、2009年公開の映画版である(邦題は『愛を読むひと』)。映画を観たときは「なぜあそこで主人公はハンナの手を握ってやらなかったのか。握ってあげていたらもしかしたらハンナは…」と切なくなったが、小説には手を握る握らないの描写はなかった。その代わりに、主人公の世代の複雑な状況、すなわち前の世代が犯したナチズムという過失を批判する教育を施され、親世代を単純に批判できる人もいた一方で、それによって苦しんだ人たちの複雑な状況がより理解できた。映画の中でハンナの手を握ってあげることが「できぬまま」だった主人公の複雑な心境が。

最後は、内輪ネタになるが、ジェイミー・フォードの『あの日、パナマホテルで』(原題：Hotel on the Corner of Bitter and Sweet)。邦訳は本学英語コースの前田一平教授による。翻訳者をこんなに身近に知った上で小説を読むのは初めての体験であった。第二次世界大戦を背景に、アメリカの移民二世たちの淡くて悲しい初恋物語も文句なく面白いが、文章に前田先生の息遣いを、主人公ヘンリーにロマンチストとしての前田先生の影を感じる一作である。

以上、英・独・米の現代小説から一作ずつ紹介してみました。興味を惹かれるものがあれば気軽に手にとってみてください。

